塩尻の文学

第8号

（桔 梗）

塩尻が舞台になっている文学作品を紹介します。

発行　2009年 7月31日

Akahiko　Kishiko　Masumi　Bokusui　Shiki　Utsubo

『菅江真澄遊覧記　伊那の中路』菅江真澄

どうして桔梗ヶ原に、ききょうの名がつけられたかなど、書かれてあります。

こうして塩尻について、昼食の中宿をとり、阿礼の社に参拝して、馬をいそがせ、たいそう広い野にでた。これが名高い桔梗が原（塩尻市）である。その昔、善光寺に般若経を奉納なさった某の君の牛が、長い旅に疲れはてて、この野に倒れ伏した。そのころは原の名も来タル経と書いて、ききょう原といったのである。また、この野辺に桔梗も多く咲くので、原の名とし、牛伏という寺もあるなど、馬をひく男が話してくれた。〔中略〕

菅江真澄（1754-1829）江戸時代の旅行家。

『乱雲驚涛』赤羽巌穴

母の見舞いに帰郷した時の作品です。母との幼い頃の思い出に、桔梗が登場しています。

入郷記（一）

〔中略〕

あゝ僕は嘗て此の原に嬉戯しつゝあったのだ。春は運動会に、夏は花摘みに、野遊に、秋は茸狩に、冬は雪達磨（だるま）に、宛然野生の駒の如く自由自在に飛び回りつゝあったのだ。僕は嘗て近隣の頑童等を拉して、此処（ここ）で戦争ごっこや、競争（レース）をして楽んだ事を記憶して居る。五六月の交になると此原にネーバと称する一種の芳香ある草が生える、其の嫩（わか）葉を摘みに来た事を記憶して居る。旧暦盂蘭（うら）盆になると、母に吩咐られて仏壇に供える為め、桔梗や、茅花や、女郎花を採りに来た事を記憶して居る、秋になると小弟を拉して松茸やヒメヂ狩りに来た事を記憶して居るのだ、が此の少年時の追懐の深い桔梗ヶ原も大変して今は全く往昔の俤（おもかげ）を留めぬのだ、僕は之れを見ると突然我揺籃（ようらん＊揺りかご）を奪われた様な気がするのだ、

赤羽巌穴（1875-1912）社会主義運動者。塩尻市生まれ。

『眉かくしの霊』泉鏡花

宿で聞いた不思議な女性の話。その中に、水（池）と美しい女性が現われます。真桔梗色の青い池と、白い桔梗の対比から鏡花の世界が感じ取れます。

……石段下のそこの小店のお媼（ばあ）さんの話ですが、山王様の奥が深い森で、その奥に桔梗ヶ原という、原の中に、桔梗の池というのがあって、その池に、お一方（ひとり）、お美しい奥様がいらっしゃると言うことですが、ほんとうですか。——

——まったくでございます、と皆まで承わらないで、私（てまい）が申したのでございます。論より証拠、申して、よいか、悪いか存じませんが、現に私（てまい）が一度見ましたのでございます。」

「……」

「桔梗ヶ原とは申しますが、それは、秋草は綺麗に咲きます、けれども、桔梗ばかりというのではございません。ただその大池の水が真桔梗の青い色でございます。桔梗はかえって、白い花のが見事に咲きますのでございまして。……〔中略〕

泉鏡花（1873-1939）明治～昭和期の小説家。

『音高く流れぬ　第二部 聖家族』村上信彦

千恵は、桔梗ヶ原の花に改めて魅力を感じます。お盆の墓参りの列を、白い桔梗にたとえている所も興味深いです。

千恵はそっと門を出て、右手に向って歩きだした。弟たちはよく散歩に出かけるが、自分はまだ一度も出歩いたことがない。そう思ってみると、目に触れる一つ一つがあたらしかった。ここではなんと惜しげもなく無数の花が咲き乱れていることだろう！桔梗、おみなえし、夏菊、松葉牡丹。〔中略〕

八月十三日から、桔梗ヶ原の活動は休息期に入った。

夕方になると、つぼみ農園の前を部落の女たちが通ってゆくのが見えた。雪袴をぬいで小ざっぱりした晴着に着かえ、手には盆花の桔梗をもっている。十丁もはなれた低い畠の中に、周囲を樹で囲まれた離れ小島のような土地があるが、それがこの辺一帯の墓地なのだ。彼女たちはそこへお精霊を迎えにゆくのである。細長い道を、女や子供たちの群が前になったり後になったりして進んでゆく。黄昏が濃くなるにつれて、白い桔梗の花だけが動いているようだ。〔中略〕

村上信彦（1909-1983）作家・女性史研究家。

『忘れえぬ山山』田部重治

なぜ、大田南畝が『壬戌紀行』の中で桔梗ヶ原を印象的に書いたのかについて。

桔梗ガ原
　やがて赤松の亭々として聳ゆるところに出る。このあたりは未開墾地で、桔梗、月見草、ひめじおん、蛍袋などが咲き乱れている。大体、ここは海抜二千四、五百尺ほどの高原地帯、これが方数里に跨れる桔梗の咲き乱れた昔のままの原であったら、どんなにこそ美しいことだろう。〔中略〕

　高原に関する作品は、過去の日本文学には殆ど現れていない。それは恐らく人口がもっと少なく未開墾地の多かった時代には、山国である日本には高原的なものが、余り珍しくなかったせいかも知れない。それにも拘わらず大田南畝が特にこの原のことを印象的に叙述しているのを見ると、彼はこの高原の雄大な、高低のない一眸千里の情緒に特別に打たれたのであろうと思われる。〔中略〕

田部重治（1884-1972）英文学者・登山家。

～～　信州が舞台の、桔梗が登場する作品です。　～～

『みちの記』森鴎外

信州への私的な旅で見た花の風景。桔梗が、他の花と一緒に霧の中から見えてきます。

明治二十三年八月十七日、上野より一番汽車に乗りていず。途にてひとたび車を換うることありて、横川にて車はてぬ。これより鉄道馬車雇いて、薄氷嶺にかかる。〔中略〕

軽井沢停車場の前にて馬車はつ。〔中略〕

停車場は蘆葦人長（ろいじんちょう）の中に立てり。車のいずるにつれて、蘆（あし）の葉まばらになりて桔梗の紫なる、女郎花の黄なる、芒花（おばな）の赤き、まだ深き霧の中に見ゆ。蝶一つ二つ翅（つばさ）重げに飛べり。

森鴎外（1862-1922）小説家・陸軍軍医。

『浅間山のひと夜』大町桂月

酒を好み旅を愛した桂月。桔梗と女郎花、薄（すすき）の組合わせの描写が美しいです。

山気肌にしみて寒を堪うべからず、かたみに木の枝おり来たり、堆（うずたか）くつみかさねて、火をつけむとするに露にうるおいたる生木、とみにはもえんとせざりしが、かろうじて火うつり、はては火焔数尺の上にのぼり火粉天に朝し、十歩の間、夜色をやぶりて髪眉あきらかなるに、ただの雑草と思いしあたりの草もよく見れば、女郎花のなよなかなるがたてる側には、桔梗のやさしきがかしらを傾け、薄（すすき）も穂に出でて火勢より起これる風になびけり。〔中略〕

大町桂月（1869-1925）詩人・随筆家。

『秋草と虫の声』若山牧水

信州あたりの高原に咲いていた桔梗について。野原の中に一輪二輪が桔梗らしい咲き方と思うとか。

秋草の花のうち、最も早く咲くは何であらう。萩、桔梗、などであらうか。
桔梗も花壇や仏壇で見ては、厭味になりがちである。野原のあを／＼とした雑草のなかに、思ひがけない一輪二輪を見出でた時が本統の桔梗らしい。
汽車が甲州の韮崎駅を出て次第に日野春、小淵沢、富士見、といふ風に信濃寄りの高原にかゝつてゆく。その線路の両側に、汽車の風にあふられながらこの花の咲いてゐるのをよく見かけた。そして、あゝもう秋だな、と思つたことが幾度かある。
あのあたりには撫子も咲いてゐた。桔梗よりも鮮かでよく眼についたが、この花は寧ろ夏の花かも知れない。

若山牧水（1885-1928）歌人。

『信濃路の花』田中澄江

牧水と異なり「桔梗の大群に感動した」とあります。紫、紫、また紫の花々を見てみたいものです。

旧軽井沢の町並みを抜けた草軽電鉄は、小瀬、長日向とだんだんに高度をあげてゆくのだが、北軽井沢に近く、右手に浅間隠山や鼻曲（はなまがり）の稜線を仰ぎながら、ふと目をやった左手の線路のほとりに、キキョウの大群を見て、あっとおどろいたことがある。紫、紫、また紫の花々が、車窓をかすめてゆく。
キキョウは戦前の東京の町であっても、ほとんど野に見ることはできなかった。〔中略〕

田中澄江（1908-2000）脚本家・作家。

▲▼▲　図書館は友だち・いつでも・どこでも・誰にでも　▲▼▲

参考資料（塩尻市立図書館でお借りしました。掲載順。）

- 「菅江真澄遊覧記 1」平凡社
- 「長野県文学全集　第1期/小説編　第3巻大正編〈2〉」　郷土出版社
- 「音高く流れぬ　第二部」村上信彦　三一書房
- 「明治社会主義文学集（二）」　筑摩書房
- 「忘れえぬ山山」田部重治　（＊信州大学付属図書館松本合同図書館で閲覧）
- 「長野県文学全集　第2期/随筆・紀行・日記編　第1巻明治編〈1〉」　郷土出版社
- 「日本の名随筆94　草」作品社
- 「野の花が好き」田中澄江　家の光協会